『東北文学』（河北新報社刊）研究序説
―創刊の経緯と背景―

高 橋 秀太郎*

Introduction to study of “Tohoku bungaku” published by Kahokusinposha : history and background to the magazine

Shutaro Takahashi

概　要

本稿においては、昭和 21 年に河北新報社より刊行された『東北文学』創刊の経緯と背景を明らかにした。特に注目したのは、日本文学報国会地方支部の流れをくむ東北文芸協会の設立・運営に河北新報社が深く関わったことである。東北文芸協会も河北新報社も、戦後の東北・宮城の文化創成を、あるいは文化運動を支え、実践するという目的を持っていた。結果として、『河北新報』の紙面作り、そして『東北文学』の誌面作りに東北文芸協会が協力し、東北文芸協会の活動を河北新報が支えるという相互協力的な関係が築かれることとなったのである。また『東北文学』には、疎開者を含む東北在住の文学者等の住所録が掲載されており、昭和 21 年前半まではこの住所録に載っている多くの人が稿を寄せることとなった。住所録掲載者、そして疎開文学者の雑誌執筆者に占める割合は昭和 21 年の後半になると下がっていくが、東北関係者の執筆率はそれほど変わらない。「東北的性格」を生かしたいという当初の目的は、執筆者だけ見ると十分果たされたと言えよう。

はじめに

本論文は、昭和 21 年 1 月に河北新報社より創刊号が発行された雑誌『東北文学』を対象とし、その創刊の経緯と背景について明らかにするものである。『東北文学』については、すでに渡部直子「戦後文芸復興史―総合文芸誌『東北文学』の 5 年間」（『仙台学』vol. 5、荒蝦夷、平成 19・11。以下渡部の論の紹介・引用は全てこれによる）が概説を施し、さらに全目次を紹介している。また戦後地方雑誌の全体的な傾向についての研究は、大原祐治が「占領期におけるローカル・メディアと文学者―坂口安吾を視座として」（『人文研究』第 41 号、平成 24・3。以下大原の論の紹介・引用は全てこれによる）で先鞭をつけているのみならず、『東北文学』発行の経緯や背景についても的確に記述している。本論は、この二人の論究を参照しながら、その創刊前後の実態や執筆者について、詳しく記述することとする。

2015 年 10 月 21 日受理
*共通教育センター准教授

1　『東北文学』発行の経緯と目的

雑誌発行の経緯と目的について、日比野士朗（元河北新報記者。このとき宮城県涌谷に疎開中）は、創刊号「編輯後記」で次のように述べている。

> 純文学の香り高い雑誌を、とのことで、久板（栄二郎→引用者注）君と二人で編輯に着手したのは戦局悲痛な七月上旬のことだつたが、間もなく仙台は灰燼に帰し、ついで時局は大転換を演じ、プランも、雑誌の型も、再三変更を余儀なくされた。ただ、われわれの熱情はずつと一貫して来たのである。
>
> かうした雑誌の発刊は年来の懸案で、出す以上は従来の文学の中央偏在を打破し、東北的性格を反映しつゝ、一流のものにしたいと

意気込んだのだが、この点船山信一氏の所論（創刊号掲載「東北的性格」―引用者注）は傾聴すべきだらう。何しろ創業ではあり、楽屋裏は苦心惨憺だつたので、今にして無量の感慨がある。

時節柄、昔のやうな部厚なものは望めなかつたが、内容はかなり自負してもいゝと思ふし、号を追ふにつれて、もつともつと充実したものにして行きたい。希くは溌剌たる新人も現れてほしい。ともかく、これはわれわれにとつて本筋な、力いつぱいな仕事と信じているので、特定の流派に偏することなくあくまで公正な態度で突き進んで行かうと思つている

『東北文学』は、仙台に本拠を置いている新聞社、河北新報社の発行である。戦後のこの時期、各県の新聞社が発行する月刊雑誌としては、青森に戦時中より続く『月刊東奥』があり、秋田には同じく昭和 21 年 1 月に創刊された『月刊さきがけ』がある。戦後早い時期の創刊であったとはいえ、発行が必ずしも東北の他県に先行しているわけではない『東北文学』の特徴は、日比野の言う「純文学の香り高い雑誌」、つまりは文学雑誌であったという点に認められる。創刊当初から日比野士朗や久板栄二郎とともに雑誌編集を行い、二人が抜けた後も終刊まで編集の中心を担った河北新報社の宮崎泰二郎も、『東北文学　第一巻第二号』(昭和 21 年 2 月発行) の「編輯室から」で、その新しさを強調して以下のように述べている。

東京以外の地方で、水準を落さず、読者にも筆者にも感激をもたれ得る文学誌の刊行といふ、全く新開拓のボーリングをすすめる試ろみに対して、野火の燃えひろがるやうな希望を感じている。

ところで、先に挙げた日比野の「従来の文学の中央偏在を打破し、東北的性格を反映しつゝ」という言葉、宮崎の「東京以外の地方で」「文学誌の刊行」をするという言葉には、中央に対抗しようという意識が濃厚に認められる。この時期に、地方雑誌が、中央のジャーナリズムに変わるメディアとして自らを位置づける言説が多く見られることについては大原がすでに指摘している通りである。また、たんに「地方で」レベルの高い雑誌を出すというだけでなく、その地方が「東北」であることへの意識が当然あったはずである。

『東北文学　第一巻第二号』掲載の「鼎談　新文学の模索」のなかで、この当時東北大学にいた桑原武夫は、「地方で文学をやるといふことは難しい」と述べる。さらに東北の現状について、「東北の人々と話をすると自分達は東北といふ所はみぢめなところだと思つて嫌で叶はないし、東北文芸といふと何か其の東北といふ名前だけで嫌になるなどといふ」、「東北は、日本の他の地方より文化は大部低かつた」、「東北人の生活を少くとも中国地方、関西程度に、それでも決して豊かだとは思はんが、あの程度まで上げなければ東北から文化が生れるといふことは非常に難しいと思ふ」と率直に語っている。

では、文化後進の地である東北において、「一流の」（日比野前掲「編輯後記」中の言葉）雑誌をつくるためにどうすべきか。そこで頼りにされたのが、昭和 20 年 11 月に正式に成立した東北文芸協会、そして東北に疎開してきた文学者たちであった。戦後さかんになった地方文化運動について、そして地方文化運動を疎開していた文学者が支えていたことについては、北河賢三が『戦後の出発 文化運動・青年団・未亡人』（青木書店、平成 12 年 11 月）のなかで多くを指摘し、大原も触れている通りである。本稿では、まず、疎開者文学者も含めて結成された東北文芸協会を取り上げることとする。

2　東北文芸協会と『東北文学』

東北文芸協会設立までのいきさつは、『東北文学　創刊号』掲載の「文壇録音」、さらに東北文芸協会に深く関わった人によって編まれた『仙台あ・ら・かると』（Qの会編、宝文堂、昭和 43 年 8 月）所収、宮崎泰二郎「この街はあの街」、朝下忠「戦後の文芸復興」で紹介されている。まず「文壇録音」から確認する。「文学の官僚統制」のため、ほぼすべての文学者を集めて組織されていた日本文学報国会の「県支部」をつくろうという動きが、戦争末期に本格化する。度重なる空襲で、日本文学報国会の本部が置かれている東京が機能不全となりつつあったこともこの動きを後押しした。昭和 19 年に宮城県涌谷町に疎開していた日比野は、日本文学報国会「県支部組織前の一過程として」設定されていた「県委員」となっていた。日比野が実際にどこまで「県支部」の組織作

りをしていたかは不明だが、「文壇録音」には、「日比野のプランは終戦後東北文芸協会として実現された」と書かれている。

協会設立のための話し合いにも参加していたという朝下は、「戦後の文芸復興」（前掲『仙台あ・ら・かると』）なかで、協会設立のいきさつについて、「中央での日本文学報国会解散にともなって」その頃仙台にいた「久板栄二郎・阿部知二・日比野士朗」ら十数人の日本文学報国会員が集まり、「このままばらばらになるのは残念である」から「新らしい会を設立して、東北における文芸活動を振興しようということに意見が一致」したと書いている。宮崎泰二郎「この街はあの街」（前掲『仙台あ・ら・かると』）には、文学報国会「仙台、福島地方のオルグに、わが亡友、山沢種樹が現われ、その残していった容れ物が、戦後の東北文芸協会として新生」したとある。

戦時中に組織作りをしていたのが日比野なのか山沢なのか、あるいは両方なのかについて、さらに戦時下の仙台における文学報国会の活動実態についてはまだ未調査だが、いずれ、渡部、大原がともに指摘しているように、文学報国会の支部活動を通して「ある程度構築された組織が、そのまま彼らの戦後における文学活動の拠点となった」（大原）ことは確実である。

ところで、東北文芸協会初代会長であった土居光知は、「仙台の思い出」（前掲『仙台あ・ら・かると』）のなかで次のように書いている。

> それ（東北文芸協会―引用者補足）はフランス文学科の桑原助教授、有永教授を始め、理学部の永野教授、また扇畑教授、西村教授、朝下教授、村岡教授、宮城県在住の文人大池唯雄氏、日比野士朗氏ら協力によるものであり、河北新報学芸部長宮崎泰二郎氏が原動力かつ支持者であって、河北新報の後援によってしばしば文芸講演会を開くことができました。（中略）その理想は、仙台にも詩人、評論家、小説家、学者、編輯者のクラブを作り、文化の一中心にならんとすることにありました。

ここで注目しておきたいのは、東北文芸協会の結成、運営に、河北新報社がかなり密接に関わったことである。

日比野はもともと河北新報社社員（昭和 15 年に退社）であった。宮城県に疎開して以降は、河北新報社によく出入りしていたという。「東北文芸協会「覚え書」」（前掲『仙台あ・ら・かると』所収）によると東北文芸協会の事務所は河北新報社出版局内におかれていた。さらに『河北新報』には、「東北文芸協会近く成立」（昭和20年10月10日）、「東北文芸協会　あす創立総会」（昭和 20 年 11 月 3 日）、「正しき世界観へ　東北文芸家（ママ）協会新発足」（昭和 20 年 11 月 5 日。写真入り）、東北文芸協会「公開講演会」（昭和 21 年 6 月 17 日）、「夏期芸術講座（主催東北文芸協会、後援仙台中央放送局、河北新報社）」（昭和 21 年 7 月 8 日）など、東北文芸協会関連の記事がさかんに掲載されている。

「東北文芸協会「覚え書」」（前掲）には、昭和 20 年 11 月 25 日の「会員懇談座談会」で「「河北新報」文化欄が新年より四ページになるので、協会幹事が編集に当たることを決定」とある。東北文芸協会の組織作りや運営に河北新報社が全面的に協力した理由は、戦後地方文化運動を後援・推進するため、そしてそのための紙面・雑誌作りをになう書き手を必要としたためであったと考えられる。

戦後の地方文化運動の内実は、先にも述べたように、北河賢三の研究によってその実態が明らかになりつつある。武力で破れた今、文化の力によって日本を再興していこうとする言説が、『河北新報』のみならず戦後すぐの日本の言論界を覆っていた。また東京が壊滅的な状況であったため、日本の文化復興をになうのが地方であるという意識があったことも『河北新報』の記事から読み取れる。戦後直後の日本で、こうした状況認識は広く見られ、文化団体が日本全国いたるところでつくられていったことを北河は数字を挙げて指摘している。

ところで、日比野の日本文学報国会「県委員」としての組織作りと、昭和 20 年 7 月ごろから久板栄二郎（昭和 20 年に宮城県名取に疎開）と計画していたという「純文学の香り高い雑誌」刊行とは時期的にみれば重なっている。両者の関連は不明だが、戦後になって、組織作りと文学雑誌刊行計画が、東北文芸協会結成、『東北文学』刊行という形で実現したことになる。日比野の雑誌作りの計画に河北新報社がのった（河北新報社の雑誌作りに日比野がのったという見方もできるか）のも、東北文芸協会への協力同様、地方に本拠を

置く新聞社として、地方文化運動の中心をにない、日本文化を再興しようという目的を果たすことが理由の一つだったと考えられる。

『東北文学』第一巻第五号（昭和21年5月）掲載の「『文藝春秋』創刊の頃」冒頭で、鈴木彦次郎は「文芸雑誌「東北文学」の性格を考慮に入れるならば、むしろ此の際「文藝春秋功罪史」とでも題して、同誌の足跡を文化史的に検討してみるのが、ふさはしいやうにも思ふけれど、それはまた他に人もあらう」と述べている。また『東北文学』第一巻第九号（昭和21年9月）より連載が開始された「世界文学」冒頭で、石川湧は「なほ、本誌の性質を考慮して、私は海外文芸に関するジヤーナリスト的な速報や、アカデミツクなお談義をさけて、われわれ自身の参考になる、日本の文化にとつての「他山の石」あるひはむしろ石をみがく他山の玉を拾ひあげて行きたいと考へている」と述べている。この二人の「文化」への言及が、編集者の依頼内容をふまえてなのか、それとも実際に雑誌を読んでの印象なのかは不明であるが、『東北文学』が、情報をただ伝えるという意味でのジャーナリステックなものや、生活とはまるで無関係の学問的なものを目ざすのでなく、「文化」批評、あるいは「文化」への貢献を目ざす雑誌と見られていたことが分かる。

「東北文芸協会「覚え書」」（前掲）によると、昭和20年11月4日の東北文芸協会発会式で、日比野士朗が「河北新報社から月刊『東北文学』がでるので援助を待ちたい」と発言したとある。東北文芸協会幹事には、創刊号から『東北文学　第二巻第九号』（昭和22年9月発行）まで雑誌の「発行編輯兼印刷人」であった、河北新報社の三原良吉が名を連ねていた。『東北文学　創刊号』「文化掲示板」には「「東北文芸協会」生る」という記事が掲載され、文芸協会の会則が全て載せられている。また『東北文学　第一巻第二号』掲載の土井光知「文芸に於けるデモクラシー」の副題には「東北文芸協会第一回例会の講演速記補訂原稿による」とあり、さらに後に触れるように、東北文芸協会の幹事や会員は『東北文学』の有力な書き手となる。こうした事実や日比野が『東北文学』創刊の当事者であったことを踏まえれば、「援助を待ちたい」という日比野の発言が、東北文芸協会に雑誌作りに協力して欲しいという意味だったと読める。一方で、河北新報社が、その後、協会の活動を後援・宣伝したことをふまえれば、文芸協会が一方的に雑誌作りや河北新報社を「援助」したということでなく、河北新報社が協会の活動を「援助」したという実態もあったことにある。

戦後における文芸運動を、あるいはもっと広く東北・宮城の地方文化運動を支え、実践するために、東北文芸協会の運営を河北新報社が担い、東北文芸協会会員は『東北文学』の紙面作りに協力するという密接な関係が、ここにつくられていたのである。

3　『東北文学』の執筆者

前節でも取り上げた『東北文学　創刊号』「文化掲示板」中の「「東北文芸協会」生る」という記事には、初代会長土井光知（東北大学）の名とともに、幹事12名の名前も載せられている。疎開者である日比野士朗（小説）、久板栄二郎（戯曲）、阿部みどり女（俳句）、同じく疎開していた哲学者船山信一の名がある。さらに宮城在住の大池唯雄（小説）、東北大学の桑原武夫、飯野哲二、宮城学院の菊沢季生、朝下忠も名を連ねている。今名前を挙げた幹事のなかで『東北文学』に一度も執筆していないのは、飯野哲二のみである。終刊までに10回以上文章を載せている日比野士朗、大池唯雄（小池忠雄）や、東北ということにこだわった評論を書いている船山信一など、後に『東北文学』の主要執筆者となる人が初代の幹事となっている。

ところで、東北文芸協会初代幹事はほとんどが宮城県在住であったが、『東北文学』創刊号「文化掲示板」には、「住所録」として、宮城県、福島県、岩手県在住の文学者、美術・舞踊・音楽関係者46名の名前が載せられている。さらに『東北文学　第一巻第二号』掲載の「文化掲示板」「住所録」には、山形県、秋田県、青森県、宮城県追加分の32名。『東北文学　第一巻第三・四合併号』（昭和21年4月）の「文化掲示板」「住所録　追加」には、岩手県、福島県在住の文学者など12名が掲載されている。『東北文学』／河北新報社は、疎開してきた人を含め、東北全県に在住している文学者、画家、音楽家、舞踊家計90名のリストをつくっていた。「住所録」が東北全県にわたっていることから、『東北文学』が、東北の（文学を通じての）文化運動の中心であろうとしたことが分かる

日比野士朗は、『東北文学　第一巻第二号』掲

載「鼎談　新文学の模索」のなかで、『東北文学』の、あるいは地方の文学運動の現実と理想についてこのように述べている。

> かういふ雑誌をいろいろ計画してやつているわけだが、現実の問題として東京の作家に手紙一本送つても、なかなか書いてもらへないと思ふ。私の方法としては東北に随分作家も疎開しているしこれが団結して、それの各々がグループを持つ。その中から新人を推薦して貰つて、東北が一つの雑誌を持つているんだといふ感じで行かうと思ふのだが、たゞ一番恐れるのは、余り郷土主義的になること、これを実は恐れる。

日比野自身も、自らの言葉通り、疎開していた涌谷で、昭和20年11月に涌谷文化協会をつくり、その中心人物の一人として文化運動を推進していた。渡部も指摘している通り、『東北文学』が住所録を掲載したのは、日比野の言う疎開者同士の「団結」を、そして「グループ」を結成する足がかりをつくるためでもあったと考えられる。

このリストに載った人の中で、『東北文学』に参加した、つまり一度でも小説・評論・随筆を寄せたり、座談会記事に登場したり、表紙絵を書いたりしたのは、4割強（39名）である。また特にこのリストに載った人が多く登場するのは昭和21年前半である。昭和21年前半（第一巻六・七号まで）の全執筆者のうちの半数強がこのリスト掲載者であるが、この割合、すなわち『東北文学』全執筆者中のリストに載っている人の割合は、昭和21年後半は3割弱になり、それ以降さらに割合が下がっていく。こうした傾向は、東北に疎開している人が執筆している割合の推移と重なる。昭和21年前半の全記事中における、東北疎開者の執筆の割合は3割強であるが、昭和21年後半になると、その割合は1割強に減少する。ただし、東北在住・出身者の雑誌掲載率が下がったということではない。リストには載っていない東北在住・出身の文学者（小説家・詩人・大学関係者など）の掲載が増えていくのである。住所録をつくったときには把握できなかった人がいたというだけでなく、交通網・連絡網が安定していったことで東北出身だが東北には住んでいない人と連絡がついたこと、さらに東北在住の新人の発掘がすすんだことが要因である。

「従来の文学の中央偏在を打破し、東北的性格を反映」するということ、そして東北在住の「新人」を発掘することという日比野が創刊号で掲げた雑誌の目的は、執筆者だけをみるならば十分果たされたと見ることができるのである。

今後にむけて

以上、『東北文学』創刊の経緯と背景について述べてきた。『東北文学』、東北文芸協会、河北新報社がいわば一体となって行った東北・宮城における地方文化運動の出発点の詳細をある程度明らかにしてきたつもりである。

今後は、続稿に於いて、実際に『東北文学』誌上において、どのような文学言説がつむがれたのかについて確認、整理するとともに、その言説の同時代的な位置、意義を明らかにすることとしたい。

〔附記〕
本論文は、平成24年度（～平成27年度）日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究Ｃ「１９４０年代日本文学における地域性の生成―東北地方における疎開・移住を視座に」課題番号：24520201）による研究成果の一部である。